

教育の方法と技術に関する一考察
～ 平成 28 年度の取り組みを振り返って ～

千里金蘭大学 黒瀬 哲也

吹田市立教育センターにおける不登校対応研究グループの共同研究に携わる者として、具体的な事例を通し、研究員の皆さんと不登校問題や教育方法、指導技術に係る課題について研究、協議を重ねてきた。

本論稿は、平成 28 年 12 月 27 日の SV による講義（研修）や 1 年間の活動経過の中で話し合い、相互に認識を深め合ったことなどを記録にとどめ、考察を加えるものである。

1. ストレス耐性と心を育む教育（情動刺激や道徳教育との関連）

「不登校を生まない学校・学級づくりとして、どのような取り組みが求められるのか。」不登校問題について、教育方法や指導技術等から多面的に研究を進める上で重要な問いである。

大きな問いに対する迫り方は様々だが、12 月の研修の具体的な絞り込みに当っては、テーマを「心を豊かに逞しく育む指導」との関連に求め、「ストレス耐性を培う教育」を取り上げた。研究紀要の冒頭でも示したように、平成 26 年度の吹田市の不登校児童・生徒数は 369 人であり依然として大きな課題となっている。不登校の背景や要因は多様であるが、「不安など情緒的混乱」と報告されるケースも多く、中には明らかな器質的要因が無いにも関わらず、何となく体調が悪い、ふさぎ込む、疲れが取れない、イライラする等いわゆる不定愁訴と言われる症状を訴える児童生徒の数も少なくないからである。

また教室では、学習指導上の課題や対人関係など複雑で多様な出来事が子供・教師を包み込み、数々のジレンマがあらわれて対応力が求められることも少なくない。佐藤学（東京大学名誉教授）は、教室のジレンマについて、「教室には、通常、1 人の教師と 30 人ほどの子供たちが存在しますが、その一人ひとりが異なった背景を背負って参加し、それぞれ異なったスタイルで行動し、それぞれ異なった認識や感

情を形成しています。教師の活動（授業）と子供の活動（学び）の舞台である教室というコンテクスト（文脈）はきわめて複雑です。」（佐藤 2010、109 頁）と述べて、教室で生起する数々の複雑な出来事に対処する方略の形成と教師による「ジレンマ・マネージング」や「ジレンマ・コーピング」の必要性について指摘している。

おりしも平成 27 年 3 月に小中学校学習指導要領の一部改正が告示され、これにより小中学校で行われる「道徳の時間」は、「特別の教科道徳」として位置づけられることになった。新学習指導要領のもと平成 30 年 4 月から小学校で、平成 31 年 4 月から中学校で全面実施となる。

道徳が教科化となった背景には、深刻ないじめの問題や子どもを取り巻く社会状況の変化などがあげられるが、自己を見つめ、他者や集団との関りなどの学びを通して、「豊かな感性と困難に打ち克って疲れない心を育む指導」は喫緊の課題である。子供の豊かな心を育む道徳教育は、学校の教育活動全体を通して進めるだけに、今回取り上げた具体的な事例の取り組みや効果については、道徳科はもとより、国語科や社会科、総合的な学習の時間、特別活動など様々な指導場面を通して実践し、確かめることができる。

（1）不登校児童、生徒の状況

不登校の児童生徒数の推移については、文部科学省が行っている、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」に詳しくあるが、はじめに平成 29 年 2 月に公表された確定値をもとに、不登校要因の内訳（表 1、2）について確かめる。

表 1：平成 27 年度 不登校児童の本人に係る要因（小学校）

	児童数(人)	割合(%)
学校における人間関係に課題を抱えている。	3,795	13.9
あそび・非行の傾向がある。	343	1.3
無気力の傾向がある。	7,856	28.7
不安の傾向がある。	9,200	33.7

その他	6,139	22.5
合計	27,333	100.0

文部科学省（2017）、平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」77 頁をもとに筆者作成。

表 2：平成 27 年度 不登校生徒の本人に係る要因（中学校）

	児童数(人)	割合(%)
学校における人間関係に課題を抱えている。	17,044	18.0
あそび・非行の傾向がある。	7,456	7.9
無気力の傾向がある。	29,284	31.0
不安の傾向がある。	27,840	29.4
その他	12,924	13.7
計	94,548	100.0

文部科学省（2017）、平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」77 頁をもとに筆者作成。

注 1： 長期欠席者の中で、不登校と回答した児童生徒全員につき、主たる要因を一つ選択。

注 2： 小中学校ともに、公立学校（国立を除く）のデータ。

平成 27 年度の不登校児童生徒の人数は、小学校で 27,333 人、中学校では 94,548 人であり、また千人率自体、小中学校ともに上がる中、不登校問題は依然として学校が抱える大きな課題である。表 1、2 から、不登校の本人に係る要因で高い割合を示している項目は、「無気力」、「不安」傾向にあることが読み取れる。

(2) 先行研究と学校教育の中で出来る取り組み

無気力、不安などの側面から悩みを持つ子供は多く、様々な自覚症状を伴う不定愁訴は、自律神経機能にも関連するものであるとして、不定愁訴と不登校、ストレス耐性について検討を加えたものに、成田奈緒子（文教大学）他 5 名による研究がある。

成田らは「不登校という状態像を呈する児の背景の一部に、不定愁訴の発現とその原因となる不安・ストレス耐性の低さが存在する」（成田 2010、15 頁）と論じている。不安や怒り、喜びなどの情動は、扁桃体等を介して前頭葉に上行した、心をやすらかに保つセロトニン神経などにより制御されていること。人の神経経路は、乳幼児期から学童期を経て構築されるとすれば、「喜怒哀楽や葛藤など様々な入力刺激はストレス耐性の組み上げにとって有効であること。」などを実験により示している。とりわけ学級活動等の指導過程における葛藤や擬似情動刺激は、前頭葉や自律神経機能などを刺激することで脳機能の発達をうながし、ストレス耐性の獲得という観点で意義を認めるとする考察は注目に値する（成田 2010、21 頁）。

ストレス耐性と演劇の効果についての研究はあまり類を見ないが、情動刺激や感情移入等の実践により豊かな子供たちの情操を培う教育活動は従来から学校現場で行われ、有効性についても経験的に認識されており、今も取り組みは継承されている。

心身の成長は、学校では友だちや教師との関係、家庭においては親の愛情や兄弟姉妹との関係など身近な人々の影響が大きく無視できないが、学校教育の中で出来る取り組みには、どのようなものが考えられるであろうか。

(3) 学校教育の中でなされるカタルシス

カタルシスという言葉がある。精神の浄化という意味合いを持ち、感情移入により心の中にあるモヤモヤした感情や抑圧を解き放つ側面を持つ。絵本の読み聞かせや紙芝居のように受容的な学習の中で行われることもあれば、演劇や合唱、道徳科で行われるモラルジレンマの

授業のように、心を浄化する感動体験や葛藤場面を意図的に創り出す場合もある。いずれの活動も学校教育の中にある情動刺激として見直す必要性は大きい。

豊かな心を育てるという面でも、心の奥にある思いを吐き出して気持ちを楽しめるという意味においても、不登校をはじめとする子供たちの気持ちを救い、情動を刺激してストレスに打ち克つなど子供の心的な耐性を高める学校の試みとして、検討する価値があるのではないかと考える。

(4) 具体的事例を通して

前出の研究が示すように情動刺激や感動体験が、前頭葉や自律神経機能をはじめとする様々な脳機能を刺激し、機能の発達を促すことでストレス耐性を獲得するという意味があるならば、演劇、合唱、群読、モラルジレンマの指導等には、思春期以降の不定愁訴や不安を原因とする様々な心身症状を緩和、軽減させる効果が期待される。

完全学校週 5 日制の導入以来、行事の精選によって学年・学校行事は少なくなってしまうが、校内音楽会を行った後に書いた 6 年生の作文から感動体験が子供に与える力と可能性を検証する。

「みんなと一緒に力をあわせることが、うれしくてしかたがなかった。リズムが体にのってきて楽しかった。」

「たくさんの楽器が私を元気づけてくれました。」

「終わってみると、とてもすがすがしい感じがしました。もうぼくたちは出来ないけど、また音楽会をしたいなと思いました。」

「私はすごくうれしかったです。それはなぜかと言うと、すきとおって、まっすぐに音が抜けていくかのように、クラベスの音が、いつも以上に体育館に響いたからです。」

クラベスは友だちと二人で音を合わせる。二人で息を合わせて演奏をすると一人の時の何倍も音が大きく聞こえ、それに心底感動したことを M 君は何度も書いている。

子供は感動体験を重ねることで人間的にも成長していく。また人は、虚構の世界で泣いたり笑ったりすることができる。

ポジティブな情動想起では、嬉しい・楽しいなどの気持ちを存分に味わい、ネガティブな情動想起では、悲しい・悔しいなどの気持ちを存分に感じる。嬉しいこと、悲しかったことを思い出す。不登校問題に関わって、ストレス耐性と心を育む教育について考察してきたが、子供たちの情動を刺激することで、心の中に沈んだ澱のような感情が解放されていく効果は見逃せない。

2. エコロジカルマップについて

最後に、今年度の不登校対応研究グループの柱となったエコロジカルマップとは、「保護者との関係で難しいトラブルに遭遇した際に、その経過や問題点をまとめ、同時に保護者を取り巻く相関図などを1枚の紙に書き出し、整理するもの」（小野田 2014、3頁）だが、小野田正利（大阪大学教授）が1975年にアメリカで考案されたエコマップを独自に改良して実践したものである。

エコマップの弱点を補い家族関係を少し広くとらえて、周囲の人たちとの関係や属性などの特徴も図示するもので、不登校対応研究グループでは、エコロジカルマップを各学校で不登校問題について協議するケース会議の場などにおいて活用することを意図して、研究と実践を行ってきた。エコロジカルマップが本来持っている下記4点の活用効果に着目したからである。

- ① 情報の共有化が図れる。
- ② 見える化によって問題点、トラブルの本質を見抜くことが出来る。
- ③ 図式化して整理することにより客観的な視点が得られる。
- ④ だれが、いつまでに、何をして事態の打開を図るか、という方針を立てることが出来る。（小野田 2014、3頁）

研究協議では、不登校をはじめとする生徒指導上の会議を行うに当たって、教職員間の共通認識を図るツールの必要性が議論となった。文章表記では無くビジュアルで、作成しながらより正確な情報や共通理解が行われる形態が求められた。会議は一度で終わるものではなく、同一事例で何度も行われるだけに、その度にまた初めから思い出すようではなかなか前に進まない。前回の内容が、模造紙など（デジタルカメラで記録した画像でもよいが）を取り出すことで再現され、そこからスタートできたなら、より有意な教育方法や働きかけ指導技術についても解明できる。途中から話し合いに参加した者でも事情がのみ込めるものであればなど欲張った要求が出される中、めぐり合ったのがエコロジカルマップであった。

「皆で議論して作り上げたマップ（図）を見ながら、学校として打つ手をいくつも考え（アセスメント）、だれがいつまでに何をするかの方針をたてて実行していく（プランニング）、そしてその成果を皆で検証しながら、次の手を模索することの大事さ」（小野田 2010、5 頁）は、対象が保護者との関係でトラブルに遭遇したケースに限らず、かなり広く生徒指導上の取り組みに活用できる。それは下記の研究員の言葉からも明らかである。

「会議に参加している人全員が同じものを見ているので、中身を確認しながら会議をすすめることができる。」

「エコロジカルマップ作成を参加者全員ですることにより、当事者意識が高まった。」

「キーパーソンが浮かび上がり、支援の方向が明確になる。」

「参加者同士の対話があり、情報提供者からの説明で終始する会議に比べ、非常に有意義なものになる。」

反響は、研究発表時に得た各学校の教職員からの声や研究紀要に掲載した研究員のコメントなどからもはっきりと分かるように、各学校

におけるケース会議での共通理解と課題の整理など、多くの部分ですぐれていることが実感できた。

今年度は研究の初年度であり、次年度以降の活動を通してエコロジカルマップの活用と子供にとって大切なつながりづくり等について、さらに研究を深めていきたい。112号の研究紀要で、不登校対応研究グループの成果を示したいと考えている。

(参考文献)

文部科学省 2017、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」、77頁

成田奈緒子、熊倉悠佳、田副真美、成田正明、酒谷薫 2010「役割演技の脳科学的評価と学級活動への応用性の検討」、『教育学部紀要第44集』文教大学、15頁、21頁

小野田正利 2014、「『エコロジカルマップ』づくりを通して、難しくなる保護者対応トラブルの出口を見つけよう」大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度学研究室、3頁、5頁

佐藤学 2010、『教育の方法』左右社、109頁

(資料：エコロジカルマップの作成や作図)

エコロジカルマップは、中心となっている人（保護者）の他者との関係性を整理し、情報を共有するためのツールである。ケース会議などでは、「担任原案作成 → 関係教員の情報の発言 → ホワイトボードで書いたり消したり → デジカメで撮る → プリントアウト」という手順で、情報をより太くしたり、正しい情報や関係性を教員同士で確実に共有できたりすることが可能である。学校現場におけるエコロジカルマップの活用の幅は、工夫次第で広がる。(小野田 2014)

以下の作成手順と考察や計画のもとで活用を図る。

① エコロジカルマップに落とす

保護者の様子、家庭状況、親子関係、学校や近所との関わりなど分かる限りの情報を集めて書く。保護者をめぐる相関関係を各種の線で書き込む。

*エコロジカルマップの相関図からは、子供が有する「つながり（ソーシャルキャピタル）」の多寡が、不登校をはじめとする生徒指導上の課題と深く関わっていることも読み取れる。

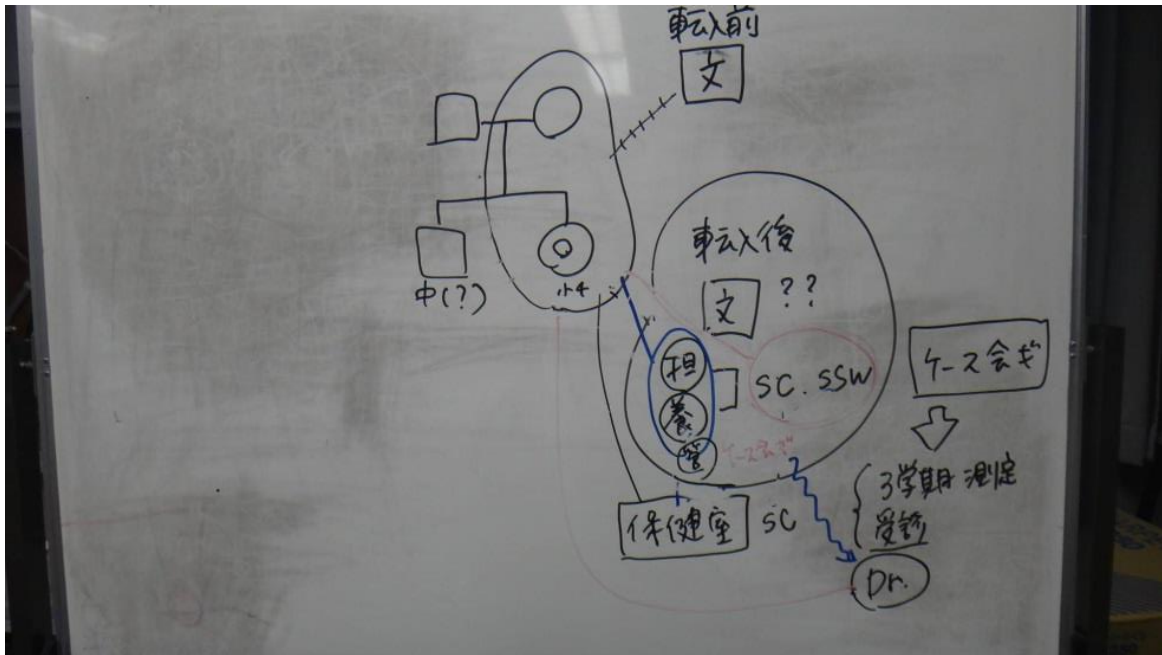
② 見立てる

トラブルの核心は何か？ エコロジカルマップを参考にして家族等関係者がどんな性格や行動特性の人物か問題点を探る。

③ 解決につなぐ

家族等関係者にどう向き合うか。また教職員の役割分担と、分担に関わる課題などを明確にする。

教育センターでの作図例①



教育センターでの作図例②

